1 英訳できない和文

次の２つの和文のうち、１つは何の問題もなく英語にできますが、もう１つはそのままでは英訳できません。英訳不可能なのはどちらでしょうか。そしてその理由を説明してください。

---

1. 彼はお昼に**おにぎり**を食べた。
2. 彼はお昼に**チャーハン**を食べた。

まずおにぎり (rice ball) とチャーハン (fried rice) の違いを考えてみましょう。おにぎりはご飯を握った丸い塊（ball）で ball は１個、２個と数えられます。それに対してチャーハンはご飯（rice）を炒めた料理で、お皿の上にどんな形でも盛れます。つまり rice には決まった境目がありません。この違いは英語において決定的な意味を持ち、rice ball は「数えられるもの」のカテゴリー、fried rice は「数えられないもの」のカテゴリーに分けられます。

そのまま英訳できないのは 1. です。この和文ではおにぎりが何個かわからないからです。個数がわからない限り、英語で言語化できないのです。英語では数えられるものを「１」か「１以外」かで厳格に分け、rice ball が１個ならば a、２個以上ならば複数形の s が必要です。

1.【単数のとき】He ate **a rice ball** for lunch.
【複数のとき】He ate some **rice balls** for lunch.

2. のチャーハンには決まった境目がないので、数えられません。そのまま無冠詞で英語にできます。

○ He ate **fried rice** for lunch.

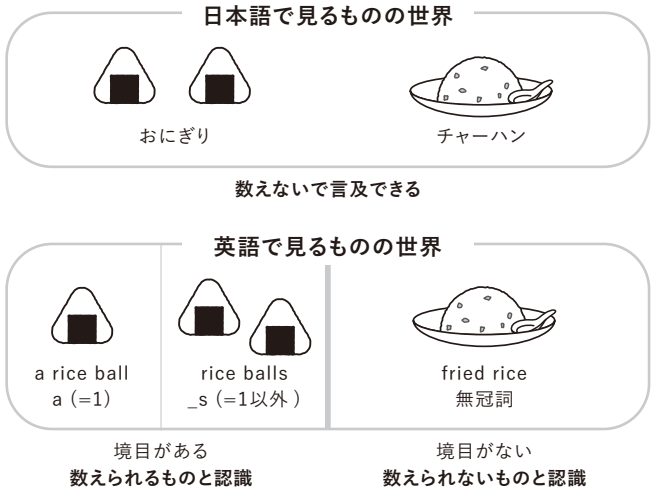
英語話者は、境目の有無でものを「数えられる」と「数えられない」の２大カテゴリーに分けて認識していますが、私たちはそのような捉え方はしません。日英語間の「ものの見方」の違いに関して、鮮烈な印象を受けたエッセイがあります（『日本経済新聞』2010 年 12 月 5 日、文化面）。作家リービ英雄氏が安部公房との逸話を紹介していました。リービ氏は安部公房の脚本の英訳を頼まれ、「象が」で始まる台詞の訳に困ったそうです。「象」が単数（an elephant）なのか複数 (elephants) かわからないと訳せないため、質問しました。

「安部先生、この象は一頭ですか、二頭ですか、それとも群れですか」と聞いた。
戦後日本の最大級の小説家は、「分からない」と答えた。
「われわれ日本人にはそんな区別はない。だからリービ君は自分で決めなさい」

安部公房が「そんな区別はない」と言い切ったことに、私は感動を覚えました。この言葉は、日本語の核心をついています。続いてリービ氏は次のように述べています。

帰りの電車の中から見た新宿の光は、あれだけおびただしいのに、a も the もなく、s もつかなく、ただ「光」なのだ、とまるで初めて見るような驚きを覚えながらじっと眺めたのであった。

言語は世界の見え方に影響を与えるものです。



※「数えられるもの」と「数えられないもの」は、文法用語では可算名詞 countable (C) nounと不可算名詞 uncountable (U) nounに相当します。本書では前者を [C]、後者を [U] と略して呼びます。

日本語では、「おにぎり」や「ご飯」、「象」などどんな名詞でも数えないで言及でき、あえて数えなければならないときだけ「3個のおにぎり」、「1皿のチャーハン」と助数詞を使います。英語で不可算の fried rice を数えるときは単位を付けて a plate of fried rice としますが、これは日本語の助数詞の使い方に似ています。この点から見ると、日本語のほとんどの名詞は「不可算的名詞」であると言えます。

2 違いがもたらす影響

日本語と英語でものの見方が違う。この認識がないまま冠詞を選ぶのは危険です。たとえば、冒頭の文1.「彼はお昼におにぎりを食べた」を英語にするとき、日本語の感覚を引きずって rice ball の単・複を考えないと失敗します。

× He ate **rice ball** for lunch.

この英文で英語話者の頭に浮かぶイメージは、たとえば「地面に落として踏まれてつぶれたおにぎり」です。単数無冠詞の rice ball は境目がないものを示します。つまり、おにぎりが「数えられない」カテゴリーに変わってしまうのです。単数の可算名詞（[C] noun）を無冠詞で使うのはよくあるミスで、私は「裸の [C]」と呼んでいます。

また文2.「彼はお昼にチャーハンを食べた」の英訳で、fried rice に a を付けると、rice が数えられるカテゴリーに属すことを示します。これだと「揚げた米を1粒食べた」ように聞こえます。

× He ate **a fried rice** for lunch.

もうひとつ例をあげます。「彼はお昼にフライド・チキンを食べた」でも、名詞チキン（chicken）のカテゴリーを見極めるのが重要です。

× He ate **fried chickens** for lunch.

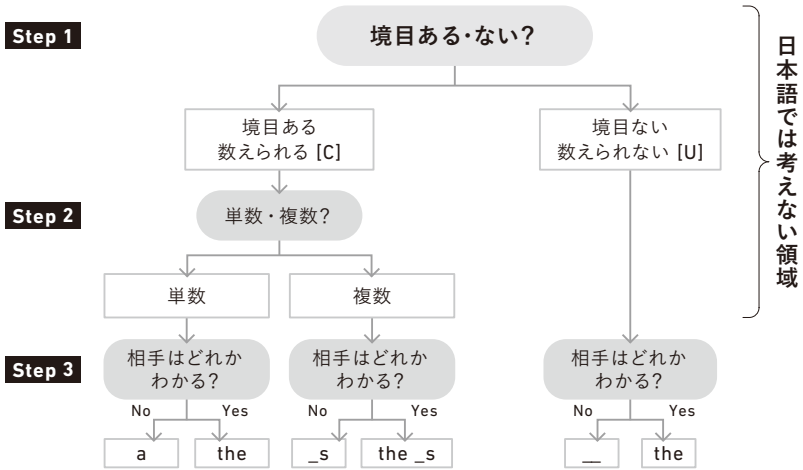
これを聞いたアメリカ人の友人は爆笑しました。彼女の頭に浮かんだのは、羽も嘴も脚も付いたまま油で揚げられてしまったニワトリです。複数形 chickens は2羽以上の鳥としての姿を保った「ニワトリ」を示します。「フライド・チキン」はとり肉を切り分けて揚げたものですから、それとはかなり違います。肉の chicken はどんな形にも切れて決まった境目がないため、英語話者はこれを「数えられない」と認識します。肉になったら chicken は無冠詞なのです。たった1文字 s が付くだけで、肉がニワトリ、すなわち「数えられる」カテゴリーに変わってしまいます。

冠詞と聞くと、a と the を思い浮かべる方が多いでしょう。実際は複数形を表す s や無冠詞も用法の一種で、名詞が「数えられる」カテゴリー

と「数えられない」カテゴリーのどちらに属すかを示す重要な役割を担っています。また、the については両カテゴリーで使えます。ただし、「その」と言って相手がそれを理解できること、話者と知識を共有していることが the を使う基本的な条件です。

3 冠詞選択の3ステップ

英語話者は、ものを境目の有無で区別し、数を意識し、さらにコミュニケーション相手との知識の共有を基準として無意識に冠詞を使い分けています。日本人は、同じことを意識的に行わなくてはなりません。言語世界を流れる地下水のような「ものの見方」を理解し違いを乗り越えるために、3ステップから成るフローチャートを用意しました。



Step 1 ▶ 数えられるか数えられないか（ものの見方）
Step 2 ▶ 単数か複数か（数の意識）
Step 3 ▶ 相手はわかるか（知識の共有）

このページ以降で示すフローチャートで「薄くなっている」部分があります。それは各章で取り上げていないステップ、または冠詞を選択するとき可能性がないフローを示しています。

たとえば、ある名詞を考えるとき、それは「境目ある、数えられる [C]」ものであり、その対称である「境目ない、数えられない [U]」ものでないならば、「境目ない、数えられない [U]」以下のフローは薄くしてあります。ご注意ください。

冠詞を選ぶ第一歩は「数えない」日本語を自覚すること。いきなり Step 3 から始めて個々の名詞に a や the を選ぼうとすると、迷路にはまってしまいます。おにぎり、チャーハン、フライド・チキンに限らず、すべての名詞を「数えられる・数えられない」に分類する Step 1 から出発するのが大事です。そして Step 2、Step 3 と段階を踏む。それが冠詞の本質を理解し、適切な冠詞にたどり着く近道です。

本書のモットーはこれです。

分けることは分かること。

これが意味することは、本書を読み進めていくうちにわかってきます。

knowledge を学習者用の辞書で調べると、可算・不可算が次のように表記されています。

『**コンパスローズ英和辞典**』
[U] またはしばしば普通形容詞（句）を伴って a ～

『**Oxford Advanced Learner's Dictionary**』
[uncountable, singular]:

どちらも knowledge は基本的に数えられないが、a が付くことがあると説明しています。つまり、複数形（× knowledges）にはならないが、単数形で a が付く singular の形になることがあるわけです。『Longman Dictionary of Contemporary English Online』には次のような文法上の注意が載っています。

GRAMMAR: Countable or uncountable?
Knowledge is an uncountable noun and is not used in the plural.
You say: He has a lot of technical knowledge.
× Don't say: He has a lot of technical knowledges.

形容詞で修飾されると a が付くほかの単語をいくつか紹介します。

A. understanding [uncountable, singular] 理解
This training helps students gain **a deep understanding** of the subject.
このトレーニングは生徒が教科を深く理解する助けになります。
B. education [uncountable, singular] 教育
Our school aims to deliver **a better education** to every child.
当校はひとりひとりの子供により良い教育を授けることを目指しています。
C. demand [uncountable, singular] 需要
There is **a large demand** for dog grooming in Japan.
日本では犬のトリミングの大きな需要があります。

6 純粋 [U] 名詞

ここまで [U] に思える名詞が [C] に変わる例を数多く見てきました。同じ数えられない名詞でも、どんな形容詞や修飾語が付いても a が付かない名詞もあります。私はこれを「純粋 [U] 名詞」と呼んでいます。「なぜ a が付かないのか？」と聞かれても、説明は困難です。どんな状況でも境目を感じさせず、漠然としたものしか表さないのが純粋 [U] 名詞の特徴だと考えてください。使用頻度の多い単語を挙げますので、これらはすべて覚えてください。

advice	アドバイス
applause	拍手、賛辞
baggage (luggage)	荷物
conduct	行い
damage	損害、ダメージ ※損害賠償（金）は damages と複数形にする。
equipment	設備
expertise	専門知識
evidence	証拠
fun	楽しさ

furniture	家具
garbage, trash, rubbish	ごみ
harm	害
homework	宿題
information	情報
know-how	ノウハウ
luck	幸運
lumber	木、木材
money	お金
music	音楽
mail	郵便物
news	ニュース
progress	進歩、前進
weather	天候

語尾で純粋 [U] の集合名詞であると判断できる単語もあります。

A. -ry で終わる名詞

jewelry, machinery, circuitry, poetry, weaponry

B. -ing で終わる名詞

wiring, piping, tubing, clothing

C. -ware で終わる名詞

silverware, ironware, glassware, tinware, earthenware, tableware, kitchenware, hardware, firmware, software, shareware, malware

日本語からの連想で間違えやすい単語には注意してください。

(1) My boss gave me **three pieces of advice**.
上司からアドバイスを３つもらった。

数えるには a piece of, pieces of という単位が必要です。

(2) All **items of jewelry** in our shop are 18K gold.
当店のすべてのジュエリーは 18 金です。

jewelry は「宝石類」を集合的に表します。数えるには items of という単位が必要です。

(3) There **was ample evidence** of his innocence.
彼の無罪の証拠はたくさんあった。

(4) It's such **nice weather** today.
今日はすごくいい天気だね。

(5) I wish you **good luck**.
健闘を祈る！

(6) My daughter had **great fun** at her birthday party.
娘は誕生会を大いに楽しんだ。

(3) 〜 (6) では、形容詞が付いていても a/an が付かずに、無冠詞であることに注意してください。

みんなの疑問 ②

純粋 [U] 名詞の判断と形容詞が付いたときの a

Q ある名詞が純粋 [U] 名詞かどうかはどうやって判断しているのですか？たとえば knowledge は私が持っている辞書では [U] 表示しかありません。それなのに、形容詞で修飾されると a が付くこともあるという話。なんか混乱しています。

A 結論から言うと、辞書には純粋 [U] 名詞の表記はないので、暗記するしかありません。knowledge のように、辞書では [U] 表記なのに、形容詞で修飾されると a が付くケースが数多く見られます。多くの英語の名詞は、話者がものをどう捉えるかによって、[U] から [C] へ、[C] から [U] へと変化します。だから純粋 [U] 名詞は覚えるしかないです。日常的なボキャブラリに限って言えば、p.47 以降で挙げた純粋 [U] 名詞を数十個覚えておけば大丈夫です。間違って a を使ったり複数形にしたりするミスを防ぐことができます。

Q もう 1 つ質問。「[U] 名詞が形容詞で修飾されたとき、必ずしも区別を示す a が使われるわけではない」という説明でした（p.44）。では、どうやって a の要否を判断すればいいのですか？

A 形容詞の描写がくっきりとしたイメージをもたらすときに、a が付くと考えてよいでしょう。たとえば「社会＝ society」は、その示す範囲が漠然として捉えどころがないように感じるため [U] です。では society を形容詞 human と aging で修飾するとどうでしょう。human society（人間社会）は human で修飾されているのに単数無冠詞で使います。human society は society とほとんど同義で、「人間の集まり」という漠然とした意味にしかならないからです。それに対して、形容詞が aging（高齢化する）になると、「老人の人口が多い社会」「日本が一例として挙げられる社会」など具体的な光景を思い浮かべやすくなります。こんなときは、他との区別がはっきりと感じられるので an aging society が自然です。

また、区別を示す a が使われるか否かを調べたいときは、英語のコロケーション辞典（活用辞典とも言います）が役に立ちます。コロケーション（collocation）とは、「単語と単語の自然な結びつき」の意味です。たとえば、「怒り＝ anger」を形容詞で修飾したとき a が必要か否かを調べるとします。『新編英和活用大辞典』（研究社）で anger を引くと次のようなエントリーが出てきます。

anger　怒り
【動詞 +】
【+ 動詞】
【形容詞・名詞 +】
【前置詞 +】
【+ 前置詞】

【形容詞・名詞 +】のセクションでは、anger の前に形容詞や名詞が使われる例が記載されています。

- **(a) fierce anger　激しい怒り**
- **in great [hot] anger　非常に怒って**
- **(an) insane anger　狂気じみた怒り**
- **(an) intense anger　激怒**
- **inward anger　内心の怒り**

a が括弧に入っています。これは話者の捉え方で a を使ったり使わなかったりすることを示しています。a の用例が圧倒的に多い場合は通常 a を伴うと判断でき、a の付かない用例ばかりならば不要だと判断できます。こんなふうに不定冠詞 a の用法を辞書で調べてみましょう。

1 数えられるか、数えられないか

A. 括弧内に適当な単語を入れてください。

1. 悠吾は朝ごはんに**ハムと目玉焼き**を食べた。
   Yugo ate (　　) for breakfast.

2. **卵白**を固くなるまで泡立ててください。
   Whip (　　) until stiff.

【解答と解説】

1. ham and fried eggs（または a fried egg）
   ham は [U] で egg は [C]。日本語では卵の数は不明。
2. egg whites または an egg white
   egg white（卵白）は [C] と [U] のどちらでも使えるが、レシピでは卵の数が指定されるので [C]。

B. 括弧内に適当な単語を入れてください。

1. **赤ワイン**は肉料理によく合う。
   (　　) goes well with meat dishes.

2. あの店はカリフォルニアの**赤ワイン**を多数取り揃えている。
   The shop carries a large selection of (　　) from California.

【解答と解説】

1. Red wine
   赤ワインを素材として総称しているので無冠詞の [U]。
2. red wines
   赤ワインの様々な種類を表し境目が存在するので [C]。

C. 括弧内に fire または damage を適当な形にして入れてください。

1. 狼は**火**を怖がる。
   Wolves are afraid of (　　).

2. **火事**でそのアパートは酷い**損傷**を被った。
   (　　) caused severe (　　) to the apartment.

3. 地方裁判所は彼に100万円の**賠償金**を払うよう命じた。
   The district court ordered him to pay one million yen in (　　).

【解答と解説】

1. fire
   「火」には決まった境目がないので数えられない [U]。
2. A fire
   「火事」は 1 件、2 件と数えられるので [C]。
   damage
   「ダメージ、損傷」の damage は純粋 [U] 名詞。
3. damages
   複数形 damages は「賠償金」を表す。

D. 括弧内に sun を適当な形にして入れてください。

1. **太陽**は太陽系の中心にあります。
（　　）is at the center of the solar system.

2. この物語は**太陽**がたくさんある世界を舞台にしています。
This story is set in a world which has many（　　）

3. うちの台所は朝、たくさん**日**が当たります。
We got a lot of（　　）in the kitchen in the morning.

【解答と解説】

1. The sun
太陽系で唯一の「太陽」なので the が必要。
2. suns
この sun は「恒星」の意味なので、数えられる [C]。
3. sun
「日光」には境目がなく数えられないので [U]。

2 単数か複数か

E. 括弧内に screw（ネジ）と hinge（蝶番）を適当な形にして入れてください。

蝶番の**ネジを**緩めて、ドアを取り外してください。
Loosen (1.　　) on (2.　　) to remove the door.

【解答と解説】

1. the screws
目の前にあるネジなので the。蝶番を留めるには複数必要。
2. the hinges
目の前にあるドアには複数の蝶番が付いているから the で複数。

F. 括弧内に weight を適当な形にして入れてください。

1. **体重**が増えている。
I'm putting on（　　）.

2. この装置は20キロの**重さ**です。
This device has (　　) of 20 kilograms.

3. 彼は100キロまでの**ウェート**を挙げられます。
He can lift (　　) of up to 100 kilograms.

【解答と解説】

1. weight
「重さ」という数えられない概念なので無冠詞の [U]。
2. a weight
20キロというある一点の物理量を指しているので a weight。
3. weights
重量挙げやトレーニング用のウェートは数えられる名詞で複数ありえるので weights。